

2001年出土の木簡

大阪・鬼虎川遺跡きらがわ



(大阪東北部)

- 1 所在地 大阪府東大阪市西石切町五丁目・同七丁目・弥生町・新町・宝町
- 2 調査期間 ○月
一 第一五次調査 一九八一年（昭56）七月一〇月
- 3 発掘機関 一 国道三〇八号線関係遺跡調査会（現・財東大）
二 阪市文化財協会、二 東大阪市教育委員会
- 4 調査担当者 一下村晴文・才原金弘・松岡良憲・山本芳彦・曾我恭子・小西優美、二 菅原章太・坂田典彦・鶴山まり・若松博恵・松田留美・瀬戸哲也・島田拓
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 旧石器時
- 7 代→江戸時代
の概要

鬼虎川遺跡は、南北約一一五〇m東西約六五〇mの範囲に広がる。

生駒山地西麓部に発達した沖積扇状地の扇端部から河内平野の沖積低地に立地し、この周辺での人間の活動は後期旧石器時代に遡る。

弥生時代前期末から中期にかけて鬼虎川遺跡は大きく発展し、とくに中期後半には最も繁栄した。河内潟東辺となる地形環境を背景に、河内中部域を包摂する大拠点集落となる。

弥生期の遺構・遺物は国道三〇八号線以南に濃密に分布するのに対し、以北では該期の考古資料は稀薄であり、弥生期の遺構面や遺物包含層より上位面で、後世の溝などの遺構群が見られる。遺物は僅少だが、古代～中世期に属する注目される資料も散見される。例えば、第四九次調査では近世期の伊万里焼碗を含む暗青灰色粗粒砂混じり粘土から、「主税」墨書き器が出土した。

一 第一五次調査

第一五次調査は、近鉄東大阪線の敷設に伴うもので、国道三〇八号線の中央分離帯、東西約一〇〇m間を七つのトレンチに区分して調査された。トレンチ名は西からD一、D二、とされ、(1)の筆塔婆は、D三区から出土した。出土した層の下で検出した溝SD一七からは、漆器椀・桶・柄穴のある部材・ヘラ状木製品が出土し、このうち漆器椀はその形態から一六～一七世紀頃に属すると考えられる。したがって木簡出土層の堆積時期としては、これら出土遺物の年代より後出となろう。

二 第五二次調査

8 木簡の釈文・内容

第五二次調査は国道一七〇号西石切立体交差事業に伴う調査で、

国道三〇八号線の以北で、概ね国道一七〇号線の西側歩道と東側歩道が調査対象となつた。工事工程による工区名に準拠し、西側歩道を三工区、東側歩道の北側を四工区、同南側を五工区と呼称して調査を進めた。

(1)の木簡は、四工区溝六から出土した。溝六は幅二・一m深さ〇・八mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は二層に区分された。溝廃絶時に相当する上層は周辺河川の氾濫に伴う粗粒砂であり、古代～五世紀前半に属する遺物を含む。溝六の伴出遺物には、土師器・須恵器・瓦器のほか、動物遺体(ウマ)、宋錢「天聖元寶」(一〇二三年初鑄)一枚が認められた。

(2)の板塔婆は、五工区溝六から出土した。溝六は幅が東側三・

五m・西側四・五mで、深さは一・〇mを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。溝六の堆積土は七層に区分されるが、土層の観察から二回の掘り返しが確認された。堆積順に、I段階、II段階、III段階に分類される。(2)は開削時のI段階で出土し、用途不明の板状木製品・動物遺体が伴出した。III段階の堆積土からは重圓文軒丸瓦がみられた。II・III段階の堆積時期は近世期頃であるが、初期のI段階はその検出面となる土層の検討から、一五～一六世紀に遡るとされるている。

一 第五三次調査

(1) 「南無阿弥陀仏」

245×17×4 061

筆塔婆である。上端を圭頭につくり、その下部に短く一段の切り込みを入れる。下端は尖らせている。完形品。短い一段の切り込みと下端を尖らせる形態をもつ筆塔婆の典型例で、これらは近年頻出している。出土例では、「南無大日如來」の名号を記すものが多く見られる(山形・後田遺跡(本誌第一九号)、兵庫・古網干遺跡(本誌第二一号)ほか)。なお、過年度に出土した木製品の保存処理の過程で確認したものである。本資料の所在については、才原金弘氏(東大・阪市教育委員会)の協力を得た。

二 第五二次調査

四工区溝六

(1) 「V□—□」

135×20×3 032

五工区溝六

(2) 「人□—□乃至法界正□×

是人□—□乃至法界正□×
利益正□×

(968)×85×9 061

(1)は長方形の板材の上端に切り込みを入れた木簡である。向かって左側は欠損しているが、左右に切り込みがあつたものと考えられる。赤外線カメラも用いたが、墨痕はほとんど遺存していなかつた。切り込みの形態から蘇民将来札などの呪符の可能性がある。

(2)は五輪塔形の頭部に下膨れの板状部が接続する大型板塔婆である。下部は欠損する。溝内での滯水状況によるものか、墨痕

は上方と下方に集中して遺存するのみで明瞭ではない。五輪塔部に胎藏大日真言を表す阿・彌・怛・裏・宿 (a vi ra kum kham)。

読みの順序は川勝政太郎『梵字講話』(一九八〇年)に従つた)の五大種子を逆順に書く。五大種子の下部には偈文を一行に分かち書きする。

右行部冒頭の「是」から末尾「家」までは約五九cmあり、これを「是」一字分の三cmで割れば、約二〇の値が得られる。経文の五言一句を単位に四句分の偈文が包摂されるものと考えられる。「是人

…」で始まる偈文で著名な『妙法蓮華經』如来神力品の「是人於佛道決定無有疑」であろうか。この偈文の類例には一乘谷朝倉氏遺跡第四六次石積遺構SF-1七三六出土例がある。また胎藏大日真言の五大種子に法華經の偈文が続く例は五反島遺跡出土例があり、矛盾しないものと考える。なお、今回の五大種子については、近隣の池島・福万寺遺跡で出土例がある(本誌第二二号)。以上釈読の試案として呈示したい。偈文の下部には「正」で始まる供養文・供養主名などが接続するようである。その字数を見込むと本資料は一mを

優に超える大型板塔婆であり、管見の限りでは最大級のものとなる。

なお、本資料の釈読にあたつては、出土当初に木下密運氏(千手寺)、水野正好氏(奈良大学)、渡辺晃宏氏(奈良文化財研究所)のご教示により判読したものに、今回保存処理後、いくつかの墨痕が新たに認められたため、菅原が補足した。また木下密運氏のご教示を頂いた。

9 関係文献

(財)東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡—東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う第一五次発掘調査概要—』(一九八三年)

東大阪市教育委員会『一般国道一七〇号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第五一次発掘調査報告』(一〇〇一年)

(菅原章太)

